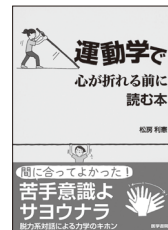


松房利憲（著）

運動学で心が折れる前に読む本

中 田 眞由美

（埼玉県立大学，作業療法士）



ヒトの身体とその運動について学ぶ運動学は、学び方によっては非常に興味深く、またそれをマスターすることはPT・OTを目指す学生にとって必須である。しかし残念ながら、苦手意識をもっている学生は少なくない。その原因をつくっているのが、「ベクトル」、「モーメント」、「てこ」等の力学用語である。これらが出てくると、結構な数の学生が頭を抱えてしまう。

著者の松房氏（長野保健医療大学）は、運動学の授業を30年間にわたって担当しているだけあって、学生がつまずきやすい箇所、苦手とする理由を熟知している。本書は、そうした学生の弱点をあらかじめ見越して執筆されており、学生がつまずかない（＝心が折れない）工夫が随所に溢れている。

本書は、運動学を学ぶ「学生」とそれを教える「先生」の対話形式で、わかりやすく話が進んでいく。そのため学生であれば、ここに出てくる「学生」を自身に重ねながら、「そうそう、そこがわから

ないの」等というふうに、ずっと読み進めていけるだろう。それに対して「先生」は、ときどき冗談を交えながら、的確な例を挙げて丁寧に解説してくれる。

たとえば、学生が苦手なものの一つに「ベクトル」があるが、それについての2人のやりとりはこんなふうに進んでいく（p.48）。

「あの一、ベクトルがよくわからないんですけど」という「学生」からの質問に、「先生」は「ベクトルはね、大きさや方向をもつんだ。大きさっていうのは量だよ。方向をもつ量はベクトル量という」と説明する。さらに学生は「方向って？」と聞いてくるが、それに対してライフルで弾を撃ったときの例を挙げ、弾が飛んでいく方向と速さを学生に考えさせながら解説し、大きさと方向をもつものがベクトル量であり、方向をもたないものがスカラー量であることを説明していく。その後の「ベクトル量が合成できたり、分解できたりするって、どういうことですか？」という質問にも丁寧に答えてくれる。

次の項に進むと、今度はベクトルがヒトの身体に応用されて、説明が進んでいく。随所に挿入されているイラストがとてもわかりやすく、ユーモラスに描かれているので、これも理解を深めるのに一役買っている。

各解説の最後に「本日のおさらい」があり、穴埋め形式の設問が用意されている。これによって、自身の理解の程度が確認できるように工夫されている。さらに「復習問題」が用意され、学習内容が復習できるという念の入れようである。もちろん、巻末には「本日のおさらい」や「復習問題」について解説と解答が用意されている。

本書は、運動学を学ぶ学生だけでなく、運動学を担当している教員にとっても、教え方のヒントが散りばめられている。学生はもちろん、教員にもお薦めしたい一冊である。

〔 A5判 144頁 1,800円＋税
医学書院 刊
☎ 03-3817-5650 〕